

Title	アテナイの居留外人についての一考察：特に紀元前五、四世紀に於ける経済活動について
Sub Title	A study on Metics in Athens especially on their economic activities in the Vth and IVth centuries B.C.
Author	宮崎, 武三(Miyazaki, Takezo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.1 (1959. 4) ,p.49- 66
JaLC DOI	
Abstract	In Greek city-states Metics (metoikoi), i.e. foreign residents, had come to obtain a definite status distinguishing them from other foreigners and giving them a recognized place in the community. Metics were found in many Greek city-states, but those of Athens were best known and played a very important part in the economic life of Athens. The old hostility against foreigners might have survived in the aristocratic city-states in which the labour was regarded as an inferior function, but it had disappeared from Athens as she became richer in trade and industry. The general opinion was expressed by Aristophanes in a striking simile: as good bread is made of flour and bran, the thriving city mixes pure citizens and solid Metics. In the fifth and the fourth centuries B. C, so many foreigners from almost all parts of the world established themselves in Athens that the non-Greek factors among her population increased more and more. As a result, there was formed in Greece in this period a kind of international nation which prepared the way, chiefly in economic interests but also in the domain of ideas and in the very framework of the Polis, towards the cosmopolitanism of the Hellenistic period.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0049">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0049</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アテナイの居留外人についての一考察

——特に紀元前五、四世紀に於ける經濟活動について——

宮崎武三

紀元前十二世紀頃からペロポネソス半島に南下を續けたギリシャ民族が一應定着した状態に入つたのは、大体紀元前八世紀頃であると思はれるが、ギリシャの國土で彼等が遭遇した第一の難事は、食糧問題であつたと見る事が出来る。ギリシャの國土には無數の山脈が連なり、平野は山脈によつて分斷された極く狹少な土地に過ぎなかつた。従つて、當時の幼稚な農業技術を以てしては、主食たる大麥、小麥の産額は、到底自給自足の段階には達し得なかつたのである。かゝる事態は、文化が進み人口が増加するにつれて、愈々恐るべき様相を呈して來る様になる。ギリシャ民族がこの問題に直面した結果、海の彼方の豊かな土地を求め、遠く海外に發展して行つたのは當然の歸結であつたと言へよう。人口過剰に悩まされたギリシャの諸都市は好むと好まざるとに拘らず、海外の新天地を求めて新しい舞臺で活動する様になるか、或は何等かの社會的改革を行はねばならない様になるのである。従つて、紀元前八世紀以後のギリシャの社會も亦本質的には太古にペロポネソス半島に移住して來た頃のギリシャ民族の社會と同様に、混亂と矛盾に満ちた社會であつたのである。トインビーは大体七二五年頃から三二五年に到るギリシャ都市國家の發展の様相を三つに分けてゐる。<sup>(1)</sup>

即ち第一はコリントやカルキスの様に、海外に農業植民地を建設して過剰人口を捌くといふ方法を取り、第二はスパルタの様に、近隣の諸國を征服して必要な土地を増加する手段に訴へ、第三はアテナイの如く、經濟的社會的な改革を試みるといふ對策に頼つたといふのである。コリントやカルキスの場合、海外植民地はギリシャ本土の社會を本質を變へずに、たゞ地理的に擴大しただけであつたから、こゝにみられる社會は本國の社會と變らないものであつた。しかしスパルタやアテナイの場合は、これとは事情が異なつて来る。スパルタは絶えざる戰鬪によつて得た征服地を維持する爲に、軍國的國家として成長する事になつた。スパルタはスパルタ人のみの國家となり、戰士たる市民の生活は「兵營或は僧院にみられる如く」<sup>(2)</sup>、嚴しく被征服者と區別される様になつた。これが、外國人を排斥するスパルタの傳統的な鎖國政策であつた。これに反してアテナイがとつた政策は、特殊な様相を帶びて来る。最初アテナイは人口問題を等閑にしてゐたが、遂にこの壓力は社會革命といふ形をとる程、容易ならぬ事態を生じた。遅れてこの問題の解決に乗出したアテナイは、他の都市國家の採用した様な政策をとる事が不可能だつたので、スパルタとは異なつた意味に於ける社會的改革を行はなければならなかつた。アテナイは第一に主食たる穀物の輸出を禁止し、未だ貧弱であつた手工業を發展させるべく、工藝方面に技術を有する外國人を招いたのであり、「この様な經濟上の革新によつて生じた新しい諸階級が等しく政治權力に參與出来る様に、政治制度の發展を計るといふ独自の解決法」<sup>(3)</sup>をとつたのであつた。ソロンの改革は、以上の如き事情の下に解されなければならない。以後アテナイは、大体に於てこの政策を受繼いで、商工業國として發展するのである。手工業方面に優れた技術を有する外國人の來住はアテナイを隆盛にさせ、同時に、アテナイの繁榮は外國人の移住を誘ふ事にもなつた。従つてアテナイはソロン以來ペリクレス時代迄、外國人に對しては開放的な態度を持續けて來た。勿論アテナイがポリスたる以上、ポリス固有の傾向として、來住する外國人すべてに市民權を與

へてゐたわけではなかつたが、市民と外國人との區別は、それ程明確なものであつたとは思はれない。しかし、紀元前四五一年エジプトから贈られた多量の穀物を市民間に分配する事になつた時、市民について嚴重な出生調査が行はれ、これ以後市民權を許されなくなつた外國人は、居留外人として市民と共住する事になつたのである。しかしながら、居留外人はその際アテナイにとつて除去する事の出来ない重要性を有していた。外國人に對する政治的制限は、決して彼等の經濟活動に於ける打撃を意味しなかつた。紀元前五世紀のアテナイ市民は、居留外人のしてゐる仕事を自分達だけで行ひ得るとは考へてゐなかつたのであり、居留外人は既に市民にとつて切つても切れない存在になつてゐた。「質のよいパンが小麥粉と麩で作られる様に、繁榮する都市は純粹な市民と堅實な居留外人を混有してゐるのである。」<sup>(5)</sup>居留外人は以前と同様に、寧ろ益々活潑に活動する様になつたのであつた。

註(1) A. Toynbee, *A Study of History*, Vol. I, p. 24.

(2) A. Zimmer, *The Greek Commonwealth*, p. 133.

(3) A. Toynbee, *A Study of History*, Vol. I, p. 25.

(4) プルートアルコスは、この結果敗訴と決つて奴隸に賣られた者が約五千人、アテナイ市民と認められた者が約一萬四千人であつたと傳へてゐる(Plutarchos, *Pericles* 37)。アテナイの勢力が増大し、市民たる事によつて受ける利益が豊富になるにつれて、漸く市民の注目の的となりつゝあつた居留外人は、市民と峻別される様になつたのである。

(5) G. Glotz, *Ancient Greece at Work*, p. 178.

Aristophanes, *Acharnenses* 508

## 二

紀元前五、四世紀に於ける居留外人の經濟的地位を論ずる爲には、當時彼等が占めてゐた法律的な地位を明かにしな

ければならない。抑々居留外人を表す *metoikoi* といふ言葉が、語源的にみればたゞ漠然と、「他人と共に生活する者」を指してゐるだけなので、居留外人とはいかなる存在であるかといふ事が、古代から修辭學者や古代註釋家の問題の種であつた。今日最も廣く受入れられてゐるビザンチオンのアリストファネス (Aristophanes von Byzanz) の定義によれば、「居留外人とは他國からの移住者であつて移住して來た土地に生活の手段を有し、一定期間その地に住んで何等かの公課を納める者」といふ事になつてゐる。しかしながらこゝで言はれてゐるのはヘレニズム時代の居留外人であつて古典時代の居留外人ではないのである。<sup>(1)</sup>従つて居留外人の研究に於ては、様々な著述を參照して明確な定義を作り上げる事が必要なのであるが、現在の段階に於ては、居留外人に關する總括的な研究を完成したクレルク (Clerc) の定義がほぼ真相を衝いてゐるものと思はれる。クレルクによれば、居留外人といふ言葉は二つの意味を持つてゐる。即ち通常使用される言葉としては移住民又は異邦人といふ漠然とした一般的な意味を持つて居り、公用語としては遙かに正確な意味を持つてゐる。即ち居留外人とは「例へばアテナイに居留地を定めてその土地に一定期間居住し、アテナイ國家の一定の負擔に應じ、最後に、幾分かは市民權に參與しながらも猶異邦人たる利益と無關係でない者」<sup>(3)</sup>を指すのである。従つて、アテナイに住む外國人が全部居留外人でなかつた事は言ふ迄もない。居留外人になる爲には、一定の條件を備へてゐる事が必要だつた。アテナイに來て居留外人たらしとする外國人は先づ一定の期間<sup>(4)</sup>が過ぎると市民たるプロステース<sup>(5)</sup>を選んで彼の住居として選んだ市區の登録簿に記されるのであり、かくしてはじめて居留外人といふ地位を得るのである。彼等は不動産を持つ事は許されなかつたし、市民と結婚する事も出來ず、民會や裁判所の票決に加はる事も出來ない。更に官吏や神官になる事も許されないし、裁判の場合にも、「身分の點では市民と同様の保護を與へられなかつた」<sup>(6)</sup>。しかし彼等は義務の點については、市民と同様に財産に應じて財産税を納入し、レイツルギア<sup>(7)</sup>を行ひ、

戦時には重裝備兵、漕手、水夫として軍務に服さなければならなかつた。彼等は財産税ばかりではなく、居留外人税 (metoikion) として、一年に十二ドラクマ、女性は六ドラクマを支拂つてゐた。しかしこの義務を負つてゐた女性は獨身者に限られ、未亡人はその息子が成人に達して税を支拂ふ様になれば、これを支拂ふ義務が免ぜられたのである。又、彼等はこの外に市場税 (xenika) を支拂つてゐたと思はれる。<sup>(8)</sup> いづれにせよこの様に彼等が國家にもたらす金額は相當なものであり、クセノフォンの如く、彼等を多數入國させる事が國家の財政上利益をもたらすと説く者も出るのであるが、居留外人の側から見れば、これはそれ程重荷ではなく、彼等の經濟活動に重大な支障を來す様なものではなかつたとみて差支へない。<sup>(9)</sup> 彼等の經濟活動にとつては、不動産の所有を許されなかつたといふ事が、もつと大きな影響を見せる様になるのである。

註 (1) Pauly-wissowa, Realenzikropædie, XV, 1414

- (2) 勿論アテナイ以外のポリスにも居留外人は存在したのであるが、これ等については資料が乏しいし、外國人の生活を規制する種々の法律に於て、アテナイの居留外人に匹敵すべきものは到底見る事が出来ない。
- (3) M. Clerc, Les Métèques Athéniens, p. 13.
- (4) この期間がどの位であつたかは知られてゐない。
- (5) 居留外人は直接國家と交渉する事が出来ないで彼に代つて民會や裁判所でその仕事をする市民が必要である。これがプロスタテース (prostataes) であつていはゞ居留外人の「保護者」とも言ふべき者であらう。
- (6) G. Glotz, Ancient Greece at Work, p. 178.
- (7) leitourgia, 國家が富者に對して課した一種の義務で、これによつて國家は經費を節減し、同時に富者から財産を搾取する事が出来た。
- (8) これが實際に支拂はれてゐたかどうかは疑問であるが、いづれにせよ少額のものであつた。

(9) クレルクは、市場税は勿論の事、居留外人税もとるに足らぬものであつたと論じてゐる (M. Clerc, Les Météques Athéniens, p. 37)。又、居留外人税は、國家の收入の爲といふよりは寧ろ、市民と居留外人との身分の相違を明確にする爲に課せられたといふ見解もある (G. Busolt, Griechische Staatskunde, I. S. 295)。

### 三

居留外人が土地、家屋の所有を許されなかつたといふ事は、當然彼等を商工業の方面に驅立てる事になつた。農民となつた居留外人も皆無ではなかつたが、彼等の農民としての意義は特に述べる程のものもなく、農業は依然として大部分市民によつて行はれてゐた。<sup>(1)</sup> 居留外人は土地に定着した農耕生活に入る事が難しかつたし、又その様な生活に入るのを好みもしなかつた。居留外人は本質的に、商工業に向ふべき存在であつた。前述の如く、居留外人を表すメトイコイ (metoikoi) なる言葉は「共に住む者」の意味であるが、ホメロスに出て来るメタナスタイ (metanastai) も同じ「共に住む者」という意味を有する。<sup>(2)</sup> このメタナスタイは、ハーゼブレックによつて「一時的共住者」<sup>(3)</sup> と解されてゐる祖國を持たぬ渡り鳥の様な放浪者を指してゐる。彼等は町から町へとさまよひ、自由な生活を送つてゐる勞働者であり、土地を所有せず従つて祖國のない放浪者なのである。このメタナスタイこそ後代のメトイコイの前身なのであり、彼等は政治に關する事のない自由な思想を持ち、たゞ商工業が平和の中に發展する様な土地を求めてゐたのであつた。アツチカ古喜劇の作者であるアリストファネスに「平和」(Pax) といふ喜劇があるが、この中で、戦争に反對し平和を求める人々の中に居留外人も入つてゐるといふ事は、居留外人の本質を理解する上に於て見逃してはならない事である。<sup>(4)</sup> 又、この喜劇に於て平和を求める人々の指導者として活躍するヘルメスの働きも亦、注目しなければならない。元來ヘルメス

は商業の神であるが、「平和」に於ては「有能な職人として」<sup>(6)</sup>平和の女神を救出す仕事を指導して居り、従つてこゝでは手工業を守護する神として考へられてゐるのである。この商人と職人の味方であるヘルメスは「非政治的で物質的な考へ方の代辨者」<sup>(7)</sup>となつた。彼は「暮し向きのよい國なら何處でも祖國である」<sup>(8)</sup>といふ見解を表明するのである。かゝる見解が海上交通の發達につれて廣まつて行つた結果、祖國に於ては恵まれない人々が續々とアテナイに入り込んで居留外人となり、自由な環境の下で商工業の方面に進出した。彼等は主として自由労働者、商人、手工業者となつたのである。

建築事業が主として居留外人の労働者の手によつて行はれてゐた事は多くの資料によつて明かになつてゐる。紀元前四〇九年のエレクトイオン(Erechtheion)の建築の勘定書には、その生活状態の分つてゐる七一人の専門職人の中、二〇人の市民(二八%)と一六人の奴隸(二三%)に對して三五人(四九%)の居留外人が見出される。又、時代はやゝ下るが紀元前三二八年のエレウシス市の禮拜堂建築に従事した職人を調べてみると、一層彼等が重要な役割を演じてゐた事が分る。即ち九四人の専門職人の中、居留外人は四五人であり、居留外人でない外國人を加へれば五四人である。これに對して市民は二〇人で、その比率はエレクトイオンの場合の二八%から二一%に下つて居り、奴隸は二〇人で同様に二三%から二一%に下つてゐる。居留外人も四九%から四八%に下つてゐるが依然として多數であり、外國人を包含すれば五八%に上昇してゐる事になるのである。<sup>(9)</sup>又、彼等が優秀な金屬工であつたといふ事は、鍛冶の神ヘファイストス(Hephaistos)の祭禮に居留外人は特別な地位を與へられたといふ事實によつても明かである。<sup>(10)</sup>更に、陶工の殆どが居留外人に屬してゐたといふ事は通説になつてゐる。<sup>(11)</sup>織物業も亦多様な職を居留外人に與へてゐたとみられるが、當時市民の家庭内ではなほ婦人や奴隸が自ら衣類を織つたのであるから、<sup>(12)</sup>大きな織物工場が存在する筈がなく、居留外

人の活動領域としては特筆する程のものではなかつたと言へよう。當時かなりの生産を行つてゐたランプ製造者のヒペルボロス (Hyperbolos) は、以前は居留外人であつたと傳へられ、又、ペリクレスの友人でリシアス (Lysias) の父親に當る居留外人ケファロス (Kephalos) は、ピレウスに大きな楯の工場を持つて居り、その工場には一二〇人もの奴隸がゐたと言はれる。<sup>(13)</sup> 有名な銀行家パシオン (Pasion) もこの種の楯工場を持つてゐた。<sup>(14)</sup>

大きな企業を持つ居留外人の活動とは別に、鞆皮工、靴屋、パン屋、料理人、驢馬曳ぎ、漁夫、人足等のさゝやかな職業についてゐた居留外人も多數存在してゐた。<sup>(15)</sup> 勿論、これよりもつと下層階級に屬する居留外人もゐたのであり、特にピレウスにはかうした貧しい外國人の男女が多く見受けられた。しかしこの様なその日暮しの外國人が果して居留外人になり得たかどうかは疑問であり、その經濟的意義については論ずるに足りない存在であつた事は言ふまでもない。

商業に於ても、居留外人の勢力が相當なものであつた事は疑問視出來ない。「アテナイが特に必要としたのは職人であつた」<sup>(16)</sup> が、土地、家屋を持たず、多少なりとも故郷たる外國に地盤を有する居留外人は工業よりも一層商業に適してゐた事が考へられる。クレルクは、「商業に従事してゐた居留外人の數は、工業に従事してゐた者の數よりも一層多い」<sup>(17)</sup> と述べて居り、ブゾルト (Busolt) も「時代の變遷と共に大規模な商業は主として居留外人の手によつて行はれる様になつた」<sup>(18)</sup> と述べてゐる。彼等は有能な商人であり、殆どあらゆる方面に活躍を見せてゐた。彼等の従事してゐた商業がいかなるものであつたかを研究するには、當時の商人がどの様に分類されてゐたかを究明しなければならぬ。當時に於て、商人は三種類に區別され、夫々カペロス (kapelos)、エンポロス (emporos)、ナウクレロス (naukleros) と呼ばれてゐた。<sup>(19)</sup> この三種の言葉が夫々いかなる商人を指してゐたかといふ事は、非常に難しい問題である。何故ならば、これ等三種の言葉は時代と共に多少その意味が變つて行き、「一人の著述家の場合にさへ、色々な商業を示すものとし

て多岐に互る意味が與へられてゐる<sup>(20)</sup>からである。ハーゼブレックは、これ等三種の言葉を綿密に區別して詳細な論議を進めてゐるのであるが、大体に於て、カペロスは地方的な小賣商人であり、エンポロスは外國貿易をする卸賣商人であると言へるであらう。カペロスを小賣商人と斷定する事は疑問であるとしても、彼等は通常、大きな資本を持たない小賣商人や呼賣商人だつたと想定しても大過ない様である。といふのは、カペロスは一般に輕蔑されてゐたからである<sup>(21)</sup>。これに反してエンポロスは重要な人物であり、その仕事は大規模でかなりの利益を收める事が出來た<sup>(22)</sup>。彼等は事實上、卸賣商人であつたと考へられる。エンポロスの行ふ外國貿易はアテナイの地理的位置からして海路の商業を意味してゐた。従つて僅かの例外を除いては<sup>(23)</sup>、エンポロスは自ら船に乗つて各地を廻つたのである。ナウクレロスとはこの船を所有してゐる者に外ならず、一般には船主と解されてゐるが、彼等も商業活動を行つてゐた事は確かであり、當時エンポロスとナウクレロスとの間には明確な區別がなく、どちらの意味にも使はれてゐたものと考へられる<sup>(24)</sup>。

居留外人はエンポロスとしてもカペロスとしても有能な商人であつた。即ち、彼等はエンポリア（外國貿易）に於てもカペリア（地方的商業）に於ても、盛な活動を行つてゐたのである。しかし、彼等の意義が最も重要であつたのはエンポリアの領域であり、就中、アテナイにとつて最も重要な穀物取引は、主として彼等の手によつて行はれてゐた。彼等は黒海沿岸、シシリア、エジプト、キュプロス等に出掛けて穀物を買入れ、これをピレウスにもたらしたのである。

デモステネスのものであると傳へられる外國貿易に關する辨論は殆ど外國人に關するものであり、これによつても彼等の活躍を知る事が出来るのである。先づ、プロトス（Protos）といふ居留外人に關する辨論によれば、彼はピレウスからシラクサへ交易する穀物商であり、この場合歸りの積荷はシシリアの麥であつたと思はれる。又、フォルミオン（Phormion）に關する辨論は、居留外人クリシッポス（Chrysippos）兄弟と彼等に金を借りたフォルミオンを問題

としてゐる。更にラクリトス (Lacritos) に関する辨論の中には、アテナイ人アンドロクレス (Androcles) とアルテモン (Artemon) なる居留外人が現れるが、ラクリトスは彼の息子であり、イソクラテスの弟子でソフィスト、雄辯家として知られてゐた。最後に、ディオニシオドロス (Dionysiodoros) に對する辨論に現れるパンフィロス (Pamphilos) は明かにエジプト出身の居留外人であり、ディオニシオドロスも居留外人だつた様に思はれる。<sup>(25)</sup> 居留外人が活躍した分野は穀物取引に限らない。アテナイに於てポントスからの鹽魚は廣く食用に供されてゐたが、これを最も多量に扱つてゐたのは居留外人カイレフィロス (Chairephilos) の一家だつた。彼等がその功により、一族の中四人までも市民權を與へられたのは有名な事實である。<sup>(26)</sup> 又、マケドニアに産する造船用の材木は、森林に恵まれないアテナイにとつて絶対に必要な物資であつたが、これも主として居留外人によつてピレウスにもたらされた。その他、各地の產物の輸入に居留外人が働いてゐた事は言ふまでもないが、東方の物資はシリア人の居留外人によつて、獨占的に運ばれてゐたと言はれてゐる。<sup>(27)</sup>

外國貿易に關聯する居留外人の職業の中で、最も注目すべきものが銀行業である事は異論のないところであらう。當時の代表的銀行家であるパシオンは解放奴隸<sup>(28)</sup>だつたのであるが、その他の銀行家も殆どが解放奴隸であつた様である。クレルクは、「かうした銀行家は、始めは事務所で使用した自分達の解放奴隸の一人にその銀行を譲るのが慣例であつたらしい<sup>(29)</sup>」と述べてゐる。彼等の銀行が多くはピレウスにあつたといふ事は、ピレウスの商業上に於ける重要性からみて殆ど疑ひない事實であり、パシオンはピレウスに、銀行のみならず住居をも持つてゐた。彼等の富がどの程度のものであつたかといふ事はパシオンに關する記録が明かに物語つてゐる。パシオンが死に際してその仕事を整理しようとした時、彼の財産は六〇タラント<sup>(30)</sup>であつたと言はれ、「その中二〇タラントが不動産で四〇タラントが事業に注がれてゐた<sup>(31)</sup>」

と言はれる。従つてパシオン以外の銀行家が彼に匹敵する程の富を有してゐたかどうかといふ問題を別にしても、アテナイに於ける彼等の立場の重要性は疑ふべくもない事實なのである。又、銀行家の外にもアテナイには投機商の一群が居り、これ等の人々の中にも居留外人が多数混つてゐた。彼等は特に、莫大な利益のある危険な海上取引に投資を行つた。この海上消費貸借（一名、冒險貸借とも言はれる）がいかに利益を上げるものであるかといふ事は、普通の利子率が一二%から一八%迄を上下してゐたのに對し、これは三〇%から三五%迄の間であつたといふ事實によつても明かである。<sup>(32)</sup>この過大なる利子率は海上消費貸借がいかに投機性に富んでゐたかといふ事を明確に示してゐる。そして、この投機性と居留外人の本質の間には、何か一脈の關聯があるのではないかと思はれるのである。

エンポリアに於ける居留外人はかくの如く活潑な活動を行つてゐたが、カペリアに於ける彼等の活動は、エンポリアに於ける如く注目すべきものは見られない様である。クレルクは「アッチカに定住した外國商人の中、一部の者が小賣商、転賣人である」<sup>(33)</sup>と言つてゐる。數の多寡はともかくとして、エンポリアに於ける穀物取引の如き重要性を持つ様なものが存在しなかつた事は確かである。しかし、居留外人がカペロスとしても働いてゐた事は言ふまでもなく、小賣商人の中には外國人の婦人が多くゐた事が知られてゐる。カペロスといふ言葉は、葡萄酒賣りとか、宿屋や公共家屋の管理人を表す事もあつた。<sup>(34)</sup>アリストファネスの「蛙」(Ranae) に於て宿屋を經營する二人の婦人は居留外人であり、<sup>(35)</sup>かかる職業を營む居留外人はかなり多かつたと見られる。酒場は同時に宿屋である場合が多く、宿屋には屢々遊女を置いてある場合が多かつたので、酒場や宿屋は香しからぬ噂的となる事が多かつたし、この經營者はよい評判を得てゐなかつたといふ點で、典型的なカペロスであつたと言へよう。又、一般に當時の生産者は、屢々自らこれを賣る商人であつたとみる事が出来る。例へばアリストファネスの「蛙」に於て、數人の奴隸さへ所有してゐる程裕福な婦人が、市場

へ出て自ら織つたものを賣つてゐるし、<sup>(37)</sup>「テスモポリアを祝ふ女達」(Thesmophoriazusae)に於ては、ある軍人の未亡人が花輪を編んでこれを市場で賣つてゐる。<sup>(38)</sup>「仕事場が同時に店や販賣所である」<sup>(39)</sup>場合も珍しくなかつた。従つて、蓄財といふよりは寧ろ生活の爲に働いてゐた手工業労働者は別として、相當の生産をあげてゐたとみられるヒペルボロスの如き人物は工業家としてばかりではなく商人としても、重要な働きをしてゐたと推測する事が出来る。いづれにしても居留外人は、エンポリアに於ける程ではないが、カペリアに於ても、見逃す事の出来ない活動をしてゐたのである。

要するに、居留外人はアテナイの經濟面に於て、殆どすべての分野に重要な活動を果して居り、アテナイをギリシャ世界の商工業中心地たらしめる有力な原動力となつたのであつた。

註(1) 「この方面では居留外人の數は非常に少かつた」(M. Clerc, *Les Métèques Athéniens*, p. 394) アリストファネスの喜劇に登場する市民の主人公、例へば「アカルナイ人」(Acharnenses)に於けるディカイオポリス(Dikaiopolis)とか「平和」(Pax)に於けるトリガイオス(Trygaïos)とかが農民であり、社會學的方面に關する限りでは典型的な農夫として表現されてゐる事に注意すべきである。但し——非常に難しい問題ではあるが——市民は農業、居留外人は商工業といふ様な意味に於て、兩者の間に勞働の分類がみられたといふ見解は誤つてゐると思はれる。(V. Ehrenberg, *The People of Aristophanes*, pp. 92~93, pp. 161~162)。

(2) Homeros, *Ilias*, IX. 648, XVI. 59, 吳茂一譯「イーリアス」(岩波書店)によれば、「卑しい極みの寄寓者<sup>かきりゆうに</sup>のよう」、「よに蔑まれる渡り者でもあるかのよう」とある。この様に彼等は、「ホメロス時代の詩歌の世界では最も憐むべき人々」であり、「族長制的組織の外部にゐる者」(A. Zimmermann, *The Greek Commonwealth*, p. 88)であつた。

(3) J. Hasebroek, *Griechische Wirtschafts- und Gesellschaftsgeschichte*, S. 28

(4) Aristophanes, *Pax* 297

- (5) クレルクもこの點を指摘してゐる (M. Clerc, *Les Métèques Athéniens*, p. 420)°
- (6) Aristophanes, *Pax* 429
- (7) V. Ehrenberg, *The People of Aristophanes*, p. 147
- (8) Aristophanes, *Plutus* 1151
- (9) G. Glotz, *Ancient Greece at Work*, pp. 179~180
- (10) *Ibid.*, p. 182
- (11) エーレンベルクはこれに反して、陶工の大部分は市民であつたと主張してゐる (V. Ehrenberg, *The People of Aristophanes*, p. 159)° しかしクレルクが指摘してゐる様に (M. Clerc, *Les Métèques Athéniens*, p. 393) 六世紀にも五世紀にも、多くの優れた陶器師は外國人或は奴隸の名前を持つてゐる點 (例へばアマシス Amasis はエジプト生れを暗示してゐるし、カクリュリオン Kachryllion フリュコス Brygos' ドゥーリス Douris 等はすべて外國人の名前であると思はれる) 更に壺に書かれた銘が必ず不完全なアッチカ語である點 (G. Glotz, *Ancient Greece at Work*, p. 182) 等からみても、エーレンベルクの説は誤つてゐる様である。
- (12) この事實はアリストファネスの喜劇に於ても裏付けられ (Lysistrata 735 ff., *Ecclesiazusae* 654, *Thesmophoriazusae* 821)°
- (13) この點については、常時の手工業の發達の程度と關聯して色々と問題が多いのであるが、この一二〇人といふ數には「家事と仕事場の兩方の奴隸が含まれてゐた」 (V. Ehrenberg, *The People of Aristophanes*, p. 168) と考へるのが妥當であらう。
- (14) クレルクは、「楯の製造は當時アテナイで隆盛を極めた産業の一つであつたらう」 (M. Clerc, *Les Métèques Athéniens*, p. 393) と言つてゐる。
- (15) M. Clerc, *Les Métèques Athéniens*, p. 394
- (16) A. Zimmer, *The Greek Commonwealth*, p. 382
- (17) M. Clerc, *Les Métèques Athéniens*, p. 396

- (18) G. Busolt, Griechische Staatskunde, I. S. 186
- (19) J. Hasebroek, Staat und Handel im alten Griechenland, II: この外にもメタボレウス (metaboleus)、パリンカロス (palinkapelos)、アウトポレス (autopoles) 等の言葉があるが、これ等についての論議はこゝでは重要でないから取上げない事にする。
- (20) V. Ehrenberg, The People of Aristophanes, p. 113
- (21) Ibid., pp. 114~115
- (22) Ibid., pp. 115~116
- (23) 例へばエウボイアからの商品は、陸路を通じて運ばれてゐた。又、冬期に於ける航海は行はれないのが慣例であつたから、この時期に於てエンボ罗斯は、地方的商人として活動したと思はれる。
- (24) G. Glotz, Ancient Greece at Work, p. 184
- V. Ehrenberg, The People of Aristophanes, pp. 117~118 従つて、以後、商業をエンボ罗斯のする外國貿易 (emporía) と、エンボ罗斯のする地方的商業 (kapelia) との二種に分類する。
- (25) M. Clerc, Les Métèques Athéniens, pp. 398~399
- (26) V. Ehrenberg, The People of Aristophanes, p. 154
- (27) G. Glotz, Ancient Greece at Work, p. 184
- (28) 解放奴隸は法律的に、居留外人と同じ地位のものとみなされる。
- (29) M. Clerc, Les Métèques Athéniens, p. 404
- (30) 一タラントンは三萬六千オボロスであつて、當時の六十タラントは大變な金額であつた。
- (31) M. Clerc, Les Métèques Athéniens, p. 405
- ツィンメルンもグロツスも、紀元前五、四世紀に於て、彼が第一級の重要人物であつた事を認めてゐる (A. Zimmern, The Greek Commonwealth, p. 392, G. Glotz, Ancient Greece at Work, p. 185)。
- (32) M. Clerc, Les Métèques Athéniens, p. 407

- (33) Ibid., p. 395
- (34) エーレンベルクは、「カペロスといふ言葉は寧ろこの方を表す方が多かつた」(V. Ehrenberg, The People of Aristophanes, p. 114) と言つてゐる。
- (35) Aristophanes, Ranae 549 ff. ここで宿屋の女將が女中に向つて、「走つて行つて、私のプロステアースのクレオンさんと呼んで来ておくれ」と叫ぶが、この言葉はこの女將が居留外人である事を示してゐる。
- (36) 遊女にはギリシヤ人もゐればバルバロイもゐたが、彼女等は普通、奴隸であつた(V. Ehrenberg, The People of Aristophanes, pp. 178~180)。
- (37) Aristophanes, Ranae, 1346 ff.
- (38) Aristophanes, Thesmophoriazusaee 446 ff.
- (39) V. Ehrenberg, The People of Aristophanes, p. 125

#### 四

アテナイは、居留外人と緊密に結合せる國家として發展した。強力な海軍を組織して一大海上帝國を作り上げ、商工業を進展させて壯大な公共事業を完成する事が出来たのは、居留外人の協力あつてこそ可能であつたのである。彼等はピレウスをギリシヤ世界の商工業中心地たらしめ、多大の財産を國庫の自由に任せる事によつてアテナイをヘラスの首都たらしめたのであつた。居留外人との提携が有益なものであつた以上、彼等に對する門戸は閉されてはゐなかつた。従つてアテナイには、ギリシヤ世界のみならず遠く世界の各方面から、多數の人々が來住して居留外人となつたのであつた。彼等の人口は紀元前五世紀から四世紀にかけて、ほぼ市民の三分の一に達してゐたものとみられる。<sup>(1)</sup> かくも多數の居留外人がアテナイ市民と共存し、さしたる波瀾もなく國家の發展に寄與したといふ事は、ギリシヤ史上眞に興味あ

る現象であつたと言へよう。ペリクレスがいみじくも述べてゐる様に、「アテナイは全ヘラスの學校」<sup>(2)</sup>だつたのである。居留外人の出身についてはクセノフォンが「リディアン人、フリギア人、シリア人、及びその他世界各國から來たバルバロイ」<sup>(3)</sup>であつたと述べてゐる。ところがクレルクの確證するところによれば、アテナイ碑文集第一卷にはギリシヤ人ではない居留外人は見當らず、第二卷に於ても約七百の居留外人碑文の中で、僅か七八がバルバロイに關係があるといふのである。<sup>(4)</sup>しかし、貧民の中には、多くの非ギリシヤ人が存在してゐた事は明かな事である。バルバロイに對する輕蔑の感情は依然として残つて居り、「リディアン人、エジプト人、カリア人、フェニキア人等の非ギリシヤ人は寧ろ惡評を買つてゐた」<sup>(5)</sup>。従つてこれ等非ギリシヤ人が、人種間の壁を越えて居留外人の地位に上るのは難しかつたのであり、結局最初は奴隸としての道を歩まなければならなかつたのである。<sup>(6)</sup>これに反して、ギリシヤ人の居留外人が非ギリシヤ人よりも高い地位に上り得た事は確實であり、従つて碑文に理れる居留外人の中には、ギリシヤ人の方が多いいふ事が容易に想像されるのである。そして時代が下るに従つて、居留外人の中に於けるバルバロイの數は益々増大したのである。環境が社會的にも經濟的にも展開するにつれて、市民の持つていたバルバロイ蔑視の感情は、段々と弱くなつて行つた。既に當時に於てさへ、アテナイは公共奴隸たるスキチア人を警官として採用してゐたのである。<sup>(7)</sup>彼等バルバロイに對する市民達の感情は、アッチカ古喜劇からみられる限りでは、嫌惡に満ちた感情といふよりは寧ろ親しみをこめた輕蔑とでも言ふべきものになつて行つた様である。教育が進歩するにつれて、アテナイ人の血統の輝かしい價值といふものは、次第に無力なものになつて行つた。何故ならば、すべてのアテナイ人が所謂「アッチカ生え抜き」<sup>(8)</sup>の者であつたのではなく、昔は外國人であつても、アテナイの教育を受けている中に、何時の間にかアテナイ人に同化して行つたといふ事が明かになつたからである。従つてこの時代になるとソフィストの中には、バルバロイとはたゞ教育のない人達に過ぎ

ないのであり、人間はすべて平等なのだといふ事を主張する者が出て来る様になつた。この様に人種間の壁が次第に取除かれた事も一助となつて、外國人は容易にアテナイに入り込み、政治的活動を斷念して經濟面に力を集中したのである。政治的特權を得る爲に障害を切開くといふ事は、當時に於ては依然として多大の困難を伴つたが、經濟面に於て成功する事は寧ろそれ以上に利益のある事だつた。市民の活動が單に政治面に止まらず、經濟的な方面にも向つてゐた事は、この結果に外ならない。經濟的社會的方面のみならず思想の領域に於てさへも、都市國家本來の堅牢な組織は弛み始めて行くのである。ヘレニズム時代のコスモポリタニズムの基盤は、既にこの時代に於て形成されてゐたのであつた。

註(1) 勿論、當時の市民の數さへ明確にする事の出来ない現状に於て、彼等の數を推定するのは困難な問題である。しかし、多くの古代史家がこの問題を研究して居り、それによればマイヤーは約市民の四分の一(E. Meyer, *Geschichte des Altertums* IV Abt. I. S. 705) ベンクトとベロツキは約三分の一(G. Busolt, *Griechische Staatskunde* I. S. 294, K. Beloch, *Griechische Geschichte* III. Abt. I. S. 272) シンメルンは約二分の一(A. Zimmern, *The Greek Commonwealth*, pp. 174-179) と推定してゐる。又、クレルクは市民と居留外人との人口比を四對五と算定してゐる(M. Clerc, *Les Métèques Athéniens*, p. 374)。しかし、クレルクの研究は居留外人の人口を過大に評價してゐる様であり、やはり市民の三分の一程度といふ見解が妥當ではないかと思はれる。

(2) Thukydides II. 41 この言葉はかの有名な戦没者追悼演説の中にみられるのであるが、ペリクレスはこの演説を「市民及び外國人の全會衆」(Thukydides II. 36)に對して行つてゐるのである。

(3) Xenophon, *Poroi* II. 3

(4) M. Clerc, *Les Métèques Athéniens*, pp. 381-383

(5) V. Ehrenberg, *The People of Aristophanes*, p. 152

(6) 奴隸の中に非ギリシヤ人が非常に多かつた事は、古喜劇に出て来る奴隸の名前によつても知る事が出来る。例へばアリストフ

アネスの「平和」(Pax)——四六に出て来るシラ(Syra)はシリア人であり、同じ行に出て来るマネス(Manes)は典型的なフリギア人の名前である。

- (7) アリストファネスの喜劇には、スキチア人の警官が幾分間拔けなお人好しとして屢々登場してゐる。例えば *Lysistrata* 434 ff., *Acharnenses* 54 ff., *Ecclesiazusae* 142 f. 等、枚舉に遑がない程である。

- (8) アテナイ人は所謂 *autochthones* として、土着の人間である事を誇りとしてゐた。

- (9) アテナイに於て市民達がどの程度經濟活動を行つてゐたかといふ事は、甚だ難しい問題である。都市國家本來の市民は政治的人間であつて、一切の經濟活動を經濟的人間である居留人と奴隸とに任せてゐたといふ見解は、確かに一面の眞理であり、それ故にこそ居留外人といふ存在の重要性が認められるのである。たゞ、この見解を紀元前五、四世紀のアテナイに無條件に適用する事は危険であり、多くの資料によつて認められる様に(例へば、古喜劇の中に出て来る商人や職人が殆ど市民であつた事を見逃してはならない)、市民の中には經濟活動を行つてゐた者もかなり存在してゐた様に思はれるのである。